

折々のもの

泥りん

愛を知らなかったときのこと

愛するに値しない人間なんているのだろうか。

愛してると言った瞬間、うそになる。

愛してるといった瞬間、もう元には戻れない。

愛から逃げて、逃げて、たどり着いた先にあったのは空虚な自分だけだった。

嗚呼、願わくは慈悲の雨で満たし給へ。潤した給へ。

無意味で無価値な人の世を。路傍に倒れていった名もなき人たちよ。

逢魔ヶ時にて

「クーン。クーン。」

外からは金属バットの音が響いています。

どうやら豆腐屋のラップも聞こえてきたようです。

フト、立ち上がって窓辺に寄ると街は茜色に染まっています。

僕は時代に取り残されてしまったようだ。

フルネーム

強く書く。Bの鉛筆で。

自分はここにいるんだと。

悲しき天使

司祭はおもむろに手を伸ばし、その場に居た人間を数えながらうなづく。

「うん、うん、うん。」

そして、僕にほほえんで言った。

「愛しているよ。」

と。僕はなぜか涙が止まらなくなっていた。

なぜと問われたら

「なぜ君は笑っているの？」

「それはね、生きていることが嬉しくてしょうがないんだよ。ウフフ。」

パステル調の

伊吹山、夕日に照らされた姿は夢か幻か。

幻想の頂きに遠くまほろばの夢を見る。

車窓から

錦に染まる木々を過ぎ、人生の黄昏もかくありたいと思う車窓から。

老いた両親ははや遠くになりけり。

